

## 平成 26 年度 法学未修者コース A 日程第 2 次選抜 小論文出題意図及び採点講評

## 第 1 問

## 【出題意図】

ロンドン・ビジネス・スクールなどで教授として教鞭もとる経済関係のコンサルタントである著者は、はっきりとした目的とその達成のための詳細な計画を事前に練り上げたうえで行動するよりも、試行錯誤と経験の積み重ねの中で問題の構造を徐々に学びながら行動することが、結果としてはよりよく目的を達成することになることを説いている。下線部の語は、著者が特徴的に用いている語であり、このような著者の主張が象徴的に表されている語である。本問は、著者の主張を正確に理解したうえで、著者が特徴的に用いている語の説明を求めることにより、受験者が十分な読解力と表現力を有しているかを問うことを意図して出題した。

## 【採点講評】

## (1)

著者は、「回り道」を、事前に詳細に立てた計画通りに活動するのではなく、複雑性・多様性を前提として、絶えず改良を加えていくプロセスを示す言葉として用いている。事前に計画を立ててその計画通りに活動するというプロセスではないこと、複雑性や多様性を前提とすること、といった点について、きちんと表現されている答案が多かった。他方、単に複雑性や多様性を前提とすれば自然と目的が達成されるということではなく、活動に対して再評価を繰り返していくプロセスであることについては、これを表現しきれていない答案も目立った。また、そもそもプロセス（過程）について問うているのに、文中に示されている具体例をただ述べる等、プロセスの語をそもそも理解していない解答も見受けられた。

## (2)

著者は、「フランクリンの言い訳」を、事前に一定の結論を定めたうえで、後付けでその結論を正当化するために体系的根拠等を援用する、という考え方を示す言葉として用いている。本問では、問題文全体の趣旨を基礎として解答することを求めているので、ただ単に、設問文の中にある語を抜き出してつなげるだけでは解答にならない。示されている具体例を踏まえて、きちんと前後の文脈を理解したうえで、それらを抽象化し、筆者が「フランクリンの言い訳」をどのような意味で用いているのかを考える必要がある。抽象的な議論を行うことに慣れていないことを窺わせる答案が多数あった。

## 第2問

## 【出題意図】

題材としたのは、40年近く前に行われた対談が最近新装版として刊行されたものである。対談のテーマは中国であるが、その内容は日本と中国との関係にとどまらず、日本文化・日本文明に対する興味深い批評が展開されている。対談という形式のため、話題が縦横無尽に移り変わるという特性があるが、それにもかかわらず、発言者（特に司馬遼太郎）は一貫した主張を展開している。長文を読解した上で、発言者の意図を十分に理解しているかどうか、また、それに対する自己の考えを的確に表現できるかを問うことを意図して出題した。

## 【採点講評】

## (1)

発言者の意図をよく理解した上で自分の考えをしっかりと展開している答案があった一方で、まったく出題意図を理解していないような答案も見られた。また、発言者が「普遍性」という言葉で何を表そうとしているのかを説明すべきところ、文明論についての自己の独自の論理に終始しているような答案もあった。題材が時事問題についての論評であっても、発言者の論理から逸脱して当該問題についての独自の見解を述べたのでは、文章の趣旨を理解したことにならない。他方、発言者の言葉を忠実になぞるだけで、単なる出題文の一部の引用又は要約にとどまった答案も見られたが、このような答案は、発言者のいう「普遍性」の意味を説明し、それに対する賛成・反対の根拠を論述せよとの出題意図に答えていないので、厳しく採点せざるを得なかった。

## (2)

ここでは、努力して「普遍性」へ向かおうという意思と、その一方で「特殊性」に閉じこもりたくなる気弱さとの関係が、「六部」を通して十分に理解されているかどうかを重視して評価し採点した。解答の多くは、この普遍性と特殊性の関係についての発言者の考えを、かなりの程度まで把握していることを示しており、それなりの評点を与えた。しかし発言者の意図が全く理解できていないのではないかと思われる答案もあり、それらに対しては低い評価とせざるを得なかった。